



ユニランSTORY 01

## 頑張る人のカになりたい。

### スポーツ義足との出会いで芽生えた夢

夢佳さん / ユニラン受講時 小学6年生

小学6年生のときに参加したユニランの授業で、パラアスリートの佐藤圭太選手（トヨタ自動車所属）の華麗な走りに魅了された夢佳さん。その後、佐藤選手が出場する陸上大会の応援にも駆けつけるほどに。義足やパラスポーツについて知識を深めるうちに、夢佳さんの中にある「夢」が芽生えてきました。

#### 初めて見た義足アスリート。 自信みなぎる姿に釘づけ！

「うわ？、すごい！カッコいい！！」

義足で跳ぶように走る佐藤圭太選手を見たときに、夢佳さんの口から思わずこぼれ出た言葉。夢佳さんが佐藤選手に出会ったのは、小学6年生のときに参加したユニバーサル・ラン〈スポーツ義足体験授業〉（以下ユニラン授業）でした。初めて間近で見た義足の印象を「最初はちょっと怖かった…」と話す夢佳さん。でも、佐藤選手が義足を外して足を見せてくれたり、義足を履いた足でケンケンしてくれたりするうちに、あちこちから「おー！」と声上がり、どんどん引き込まれていきました。

実際に自分も義足を付けて歩いてみて、その好奇心は驚きへと変化します。

「思っていたよりも義足は重かったです。歩くときも、バランスを取るのが難しかったです。先生に手を引いてもらわないと歩けない子も、いっぱいいて。だから、義足でこんなに軽々と走れる佐藤選手はすごい！と思いました」

夢佳さんの心に何より焼きついたのは、佐藤選手の自信に満ちあふれた表情と、イキイキと楽しそうに走る姿。「病気で足を切断してつらい思いをしても、好きなことを見つけ頑張っているなんてカッコいい！」と、感動したそうです。

それまでは、パラスポーツのことも、義足アスリートのことでもまったく知らなかったという夢佳さん。ユニラン授業で間近に触れ合ったことで、義足を履いている人も「自分たちと何も変わらない」と肌で感じたそう。何よりも佐藤選手のダイナミックな走りに魅せられ、義足アスリートについてもっと知りたいと思うようになりました。

## ライバル選手との大接戦。 パラスポーツってすごい！

ユニラン授業時に、佐藤選手が3カ月後に地元・高松で開催される陸上大会に出場することを知って、競技場まで足を運ぶと決めた夢佳さん。そのときのことを夢佳さんのお母さんはこう話します。

「ユニラン授業のときに配られた大会のチラシを持ってきて、『絶対応援に行く！』と何度も繰り返すんです。あまりに言うものだから、『じゃあ、お友達を誘って行こうか』とみんなで出かけました」

大会当日、夢佳さんの目の前で繰り広げられた100m走は、佐藤選手と、これまで競り合いを重ねてきたライバル選手たちと息もつかせぬ大接戦となりました。結果は佐藤選手の勝利！わずかなタッチの差で、佐藤選手が先にゴールへ。選手たちが繰り広げた迫力のレースに、スタンド全体が沸いた瞬間でした。

「佐藤選手が走る姿をもう一度間近で見たい」と、この日を待ち望んでいた夢佳さんでしたが、授業とはまた違う本気の走りに「めっちゃくちゃ速い！すごい！」と大興奮。普段はもの静かな夢佳さんが「頑張れー！」と声を張り上げて応援する姿を見て、お母さんもびっくりしたそうです。



試合のあと、夢佳さんのもとへ佐藤選手があいさつにきてくれましたが、喜びと照れのせいか、うまく話せなかったそう。佐藤選手が握手をしようと手を差し出したときは、どっちの手を出せばいいのかかわからずパニックになるほどだったと、お母さんは笑って振り返ります。

でも、喜びを噛みしめたのは、夢佳さんだけではありませんでした。「授業を通じて義足アスリートに興味を持ち、競技場まで応援に駆けつけてくれる子がいたことが本当にうれしかった」と佐藤選手は話します。

大会に足を運んだことで、ますます義足アスリートに興味を持った夢佳さん。「障がいがありながらスポーツに熱中している人が、こんなにたくさんいるんだ」と、パラスポーツという世界の広がり気づききっかけにもなりました。



## 「私も力になりたい」。 胸に芽生えた、未来への想い

ユニラン授業を受けたとき小学6年生だった夢佳さんも、もう中学3年生。

近ごろは、将来どんな職業に就きたいかを考える時間が増えたといいます。そんな夢佳さんを見てお母さんは、「数年前はパン屋さんになるのが夢だと言っていました。でもユニラン授業に出会ったことで、ちょっと変化があったみたいです」と話します。

「パラスポーツで頑張っている選手たちを、一番近くで支えられたらいいなって。たとえば義足をつくる人とか、自分も何かの形でパラアスリートの力になりたいです」

今はそのように話す夢佳さん。幼いころから周りの友達を助けたり、先生を手伝ったりすることが好きだったという夢佳さんですが、「選手を一番近くで支えたい」という願いは、そんな夢佳さんの思いやりが詰まった、大切な未来の「芽」に違いありません。

ユニラン授業をきっかけに、自分とは遠かった義足やパラアスリートという存在がぐっと身近になり、やがてそれは夢佳さんのなかで小さな夢へと変わっていきました。「義足を履く人たちをサポートしたい」という、ユニラン授業を通じて芽生えたその夢は、これからのさまざまな出会いのなかで、どんな風に育まれていくのでしょうか。

その先にはきっと、夢佳さんにしか描けない未来が待っているはずで。



## 先生、走れるようになったよ

### 一歩前に踏み出してつかんだ、大きな自信

優佳さん / ユニラン体験会参加時 小学3年生

小さい頃から走ることが苦手だった優佳さん。小学校3年生のときに参加したユニランの体験会で、パラアスリートの池田伸彦選手と出会ったことが大きな転機になりました。今では走ることが大好きになったという優佳さん。優佳さんの中にどんな変化が起こったのでしょうか？

#### 「私も走れるかも」

#### ユニラン体験会で芽生えた前向きな気持ち

「義足はね、メガネみたいなものなんだよ。視力の低い人がメガネをかけるように、僕は義足を履いているんだ」

ユニバーサル・ラン<スポーツ義足体験授業>(以下ユニラン体験会)でそんなことを教わったとき、「なるほど、そうなんだ!」と目から鱗が落ちるようだったという優佳さん。当時、優佳さんは小学3年生。「義足を履いて走っている人の生の声を聞くことで、子どもたちにいろいろな気づきがあるかも」と考えたお母さんが、地元の競技場で行われたユニラン体験会に、優佳さんとお姉さんを連れて出かけたのが参加のきっかけでした。

この日初めて、義足を履いた人を見たという優佳さん。自分でもスポーツ義足を付けて歩く体験をするうちに、「義足はその人の大切な一部なんだ」という実感が深まっていったといいます。そんな優佳さんの様子を、お母さんは

うれしい思いで見つめていたそうです。

「自分で実際にスポーツ義足を体験するうちに、『障がい者』とか『健常者』とか、そんな風に区別すること自体おかしいと感じたみたいです。『病気になったり事故に遭ったり、人それぞれに違う経験をしていても、みんな同じなんだね』って」

この日はもう一つ、優佳さんにとって忘れられない出会いがありました。義足を履いて颯爽と走る、池田伸彦選手です。実は優佳さんは、小さいころから平らな場所でも転んでしまうことが多く、走るのも遅かったためか、体育の授業にも苦手意識を持っていたといいます。そんな優佳さんに「一緒に走ろう!」と声をかけ、走り方の手ほどきをしたのが池田選手でした。

「こんな風にやるとうまく走れるよ」「じゃあ、次は足を上げてダッシュをしてみよう」とコツを教わるうちに、優佳さんはだんだん走ることの楽しさに目覚めていきました。走り方だけではありません。「病気や怪我は大変かもしれ

ないけど、いろいろな人との出会いがあったから、今の自分があるんだ」と、人と人との関わり大切さも池田選手は教えてくれました。

ユニラン体験会が終わるころには、「私も走れるようになるかも」と、優佳さんの中に今までにない前向きな気持ちが芽生えていたといいます。



## 「走るって楽しい！」

### 練習の成果を見せた、1年越しの再会

ユニラン体験会に参加して、「これからもかけっこの練習を続けていこう」と心に誓った優佳さん。いつかまた池田選手と一緒に走れる日を夢見て、練習に励む日々がスタートしました。体育の授業に積極的に参加してみるようになったり、「池田選手にこうやって教えてもらったから！」と正しいフォームや足上げを意識してみたり、池田選手の教える思い出しながら、毎日欠かさず走る練習をするように。

そんな優佳さんの姿を見たお母さんが「池田選手にまた会わせてあげたい」と、LIXILにお手紙を届けてくれました。そのお手紙を受け取ったLIXILスタッフが願いを叶えたいと動きます。そして、ユニラン体験会からちょうど1年が経つころ、ようやく再会のチャンスが訪れたのです。

ワクワクと期待に胸踊らせて、再会の日を迎えた優佳さん。池田選手とLIXILスタッフが待つ場所へ、この日のために用意したプレゼントを抱えて出かけました。プレゼントの中身は、池田選手の似顔絵と、義足やパラリンピックについて学んだ内容をまとめた自由研究の画用紙。池田選手に手渡すと、「久しぶりだね。ありがとう！」とあふれるような笑顔で受け取ってくれました。

「先生、私あれからかけっこ頑張ったんだよ。練習の成果を見て！」と優佳さん。いよいよ、1年間の練習の成果を披露する時間です。周りのみんなが見守るなか、「ヨーイドン！」のかけ声で、池田選手とともにフロアを駆け出します。「すごく速くなってね！本当にたくさん練習したん

だね」と驚く池田選手。優佳さんも「スピードを感じながら走れた！楽しい！」と、達成感いっぱいの表情でした。

気がつけば、優佳さんにとって苦手だった「走ること」は、大好きなことへと変わっていました。

## 勇気を持って踏み出した一歩が、 大きな自信に

池田選手は日ごろから「挑戦」という言葉を胸に刻み、目標に向かって果敢にチャレンジすることの大切さを会う人たちに伝えています。「池田選手が諦めずに頑張っているから、私も頑張ろうと決めました」と、優佳さんも池田選手の姿勢に影響を受けたひとりです。

幼いころから何ごとにもひたむきで、頑張り屋さんだった優佳さん。だけど、いつもどこか自信なさげな様子だったとお母さんは話します。ユニラン体験会に参加してからは、前向きに挑戦する気持ちが芽生えたおかげか、性格も前より明るくなり、輝くような笑顔を見せるようになりました。その根っこにあるのは、「自分にもできるんだ」という自信。「人前で恥ずかしくならなくなった」「受け答えがしっかりしてきたね」と、ご家族のみなさんもその姿を頼もしく見つめています。

池田選手も「優佳さんからお手紙をもらい、ユニラン体験会から前向きに挑戦していることを知って、刺激をもらったんです。再会したときの明るくて元気な表情を見て、本当にうれしい気持ちになりました」と話します。

ユニラン体験会を通じて、義足を履いている人も自分と変わらないことに気づいた優佳さん。そんな気づきと共に、困難に直面しても挑戦し続ける前向きな姿勢を池田選手から教わりました。

「できない」から「私もできる」へ、大きな一歩を踏み出した優佳さん。これからさらにワクワクするような歩みが、その一歩から広がっていくはずですよ。





ユニランSTORY 03

## パラスポーツで、僕も金メダルを！

### 「当たり前」を分かち合う心の交流

暖太さん / ユニラン受講時 小学5年生

物心ついた時から義足で生活していた暖太さん。パラアスリートの佐藤圭太選手（トヨタ自動車所属）に出会ったのは小学3年生のときでした。そこから2人の「走ること」を通じた交流が始まります。そんなある日、暖太さんが通う学校に佐藤選手を招待して、ユニランの授業を行うことになりました。

### 義足で走ることの可能性を 教えてくれた佐藤選手

暖太さんがパラアスリートの佐藤圭太選手と初めて出会ったのは、小学校3年生のとき。日常用義足を履いている人がスポーツ義足を体験できる教室に参加したことがきっかけでした。

生まれつき足の骨に疾患があったという暖太さん。物心ついたときから義足の生活でしたが、体を動かすことは大好きで、体育の授業や運動会にも日常用義足を履いて参加していました。しかし、日常用義足では参加が難しい競技も多く、悔しい思いをすることもあったといいます。

義足の教室に参加して初めて、スポーツ義足の存在を知った暖太さん。いつも履いている日常用義足との違いに、とても驚いたそうです。

「義足が地面に当たったときの感触が、全然違ったんです。

バネみたいに跳ねて、これなら自分も速く走れるかも、とワクワクしました」

それまではパラスポーツのことも、義足のアスリートがいることも、ほとんど知らなかったという暖太さん。スポーツ義足で軽やかに走る佐藤選手を見て、「カッコいい！自分もこういう風に走りたい！」と、アドバイスをもらいに行ったのが仲良くなるきっかけに。「走る」ことを通じた、暖太さんと佐藤選手の交流の始まりでした。

### スポーツ義足を知って、 できることの幅がぐんと増えた

「佐藤選手はスポーツ義足のバネの使い方がすごくうまいんです。体重をうまく乗せて、跳ねるように走る姿がとてもカッコいい。自分もあんな風に走りたいなっていつも思います」

佐藤選手のすごさを熱く語る暖太さん。



佐藤選手はこれまで、たくさんのアドバイスを教えてくれたといいます。佐藤選手のアドバイスを実践して、実際に50m走のタイムは劇的にアップ。体育の授業や運動会でも参加できる競技の幅が広がり、運動がさらに楽しいものになりました。何より、友だちと一緒にできることがぐんと増えたのが、暖太さんにとって本当にうれしかったのだそうです。

今では、日常用義足からスポーツ義足へのスムーズな付け替えもお手のもの。カバンにスポーツ義足を入れて登校し、体育や休み時間の前にパッと付け替えています。スポーツ義足の独特な形を見て、「何それ、カッコいい!」と驚く友だちも最初は多かったようですが、スポーツ義足を履いて走る暖太さんの姿は、校内でもだんだんと当たり前の光景になっていったようです。

そんなある日、「スポーツ義足について、学校の友だちにもっと知ってもらおう」と、佐藤選手を暖太さんの小学校に招き、ユニバーサル・ラン〈スポーツ義足体験授業〉(以下ユニラン授業)の授業を開催することになりました。

## 実際に体験することで 「自分ごと」として考えられる

ユニラン授業の当日、参加してくれた児童のみなさんに「スポーツ義足について知ってる人はいますか?」とまず尋ねてみると、全員が勢いよく「はい!」と手を上げてくれました。他の学校ではなかなか見られない光景です。

だけど、スポーツ義足がどんなものか知ってはいても、実際に体験したことがある人は暖太さん以外にはいません。暖太さんにとっての「当たり前」を、学校のみんに体験してもらえ、よい機会にもなりました。

初めてのスポーツ義足に苦戦しながらも、独特の跳ねる感覚がおもしろかったのか、楽しそうな声を上げる児童のみなさん。お手本として、佐藤選手が颯爽と走る姿を見せたときは「すごい!」と大きな歓声も上がりました。みんなのリアクションを見て、暖太さんもどこか誇らしげな様子。

暖太さんがいつも履いている義足は、太もも部分から装着する「大腿義足」。一方、佐藤選手は膝下部分から装着す

る「下腿義足」です。大腿義足は「膝継手」と呼ばれる関節部分のコントロールが難しく、一般的に下腿義足よりも走ることへの難易度が高くなります。

佐藤選手はそうしたことも説明。「僕もたくさん練習を積んで速く走れるようになったけど、僕以上に難しい義足で走っている暖太くんは、本当にすごいんだよ」という佐藤選手の言葉に、児童のみなさんもどこかハッとした様子でした。

「ユニラン授業を終えてから、休み時間に鬼ごっこにかに誘ってくれる友達が前よりも増えた」と暖太さんは言います。周りのみんなも、実際にスポーツ義足を体験したことで暖太さんにとっての「当たり前」を知り、義足や暖太さんの存在が、ぐっと身近に感じられるようになったのかもしれない。

## 将来の夢は パラスポーツで金メダルを獲ること!

現在は中学校に通う暖太さん。中学からは陸上部に入部し、他の部員たちと同じように、トレーニングに励む毎日を送っています。そんな暖太さんの将来の夢は、佐藤選手と同じパラスポーツの選手になること。そして、パラスポーツの大会で金メダルを獲ることです。

「将来の夢を佐藤選手にも話したら、一緒に頑張ろうぜ!」と言ってくれたのがすごくうれしかったです。陸上はもちろんですけど、水泳や球技など、他のいろいろなスポーツにもこれからどんどんチャレンジしてみたいです」

スポーツ義足によって、走ることがぐっと身近なものになった暖太さん。日常用義足とスポーツ義足を履き替えるのは、スポーツの時に靴を履き替えるのと変わりません。ユニラン授業を通して、そうした暖太さんにとっての当たり前を周りのみんなと分かち合い、より深い心の交流もできるようになりました。

スポーツ義足、そして佐藤選手と出会って、大きな夢を見つけることもできた暖太さん。これからの歩みもとても楽しみです。



## 教師生活の最後に、 義足の校長先生が伝えたかったこと

中村さん / ユニラン開催時 学校長

愛知県の小学校で校長先生を務める中村さんは、教員生活のさなかに左足を切断。義足ユーザーになりました。校長先生の職務を務め上げ、退職を間近に控えたあるとき、自身が勤務する小学校でユニランの授業を開催します。その背景には、中村さんが生徒たちに伝えたかったあるメッセージがありました。

### 教員生活のさなかに左足を切断、 義足の生活へ

2021年3月まで愛知県の小学校で校長先生を務めていた中村さん。退職を間近に控えて「児童たちの心に残る授業を」と実施したのが、ユニバーサル・ラン<スポーツ義足体験授業>（以下ユニラン授業）でした。中村さんには児童たちにユニラン授業を受けさせたいという想いがありました。

実は中村さんご自身も義足のユーザー。教員生活のさなかに、左足の太もも部分から足を切断しました。手術が終わった後の不安な気持ちを、今でもはっきり覚えているといいます。

「手術後に意識を取り戻して、自分の足がなくなっているのに気づいたときは、わかっていたとはいえショックでした。現実を直視したくなくて、しばらくは自分の左足を見ないようにしていましたね。周りの人が、自分の足で普通に立っているのを見ただけでも、なんだか泣けてしまって」

手術が終わってしばらく経ち、義足を履いて日常生活を送るためのリハビリをスタート。もともと運動や体力に自信があるわけではなかった中村さんは、リハビリ当初は慣れない義足にとっても苦労した、と当時を振り返ります。「靴はどうやって履けばいいんだろう？」「トイレはどうすればいいんだろう？」と日常生活のイメージも湧かず、疑問だらけだったとも。

それでも「教員として復帰したい」という熱意のもと、毎日の地道なリハビリに打ち込みます。その甲斐あってか、徐々に義足にも慣れていき、数ヶ月後には職場に復帰できるまでになりました。そんな中村さんを待っていたのは、これまでとは“見え方”が異なる世界でした。

### 義足になって、初めて見えてきたもの

「職場に復帰してまず思ったのが、義足だとしゃがむのが難しいため、児童と視線を合わせて話すことが難しくなったということ。それに点字ブロックのような小さな凸凹も

少し歩きづらかったりして。義足になってから、そういう難しさについて、よく考えるようになりました」

今まで当たり前に行っていた動作が難しくなったり、誰かのバリアを取り除くためにつくったものが、他の誰かのバリアになったりもする。義足になって初めて、そうした社会に存在するさまざまなバリアや、バリアを取り除く配慮のあり方もさまざまであることに目が向くようになったといえます。

職場復帰後に赴任した小学校は、車椅子の児童も通うバリアフリーが行き届いた学校でしたが、それでもまだ、校内のいろいろな場所にバリアが存在することに気づいたそうです。

「スロープは学校内の各所に設置されていましたが、勾配が急で義足でも歩きづらく、車いすの児童もそこだけは自走できなかつたりしました。また手すりが片側だけにしか付いていないような場所も。義足になる以前は、そういった細かいバリアに本当に無頓着でしたね。障がいを障がいと思わせなくするような工夫がもっと必要だと強く感じて、校長の立場になってからは、校内のさまざまな改善に取り組むようになりました」

自分が義足であることは、児童たちに伝えるべきか迷ったという中村さん。しかし中村さん自身、校内でもたまたま転んでしまうことがあったため、隠すことは不便だと感じ、率直に伝えることにしました。最初は驚いた児童もいたようですが、すぐに当たり前のもんとして、受け入れてくれたようです。

そんな中、東京2020オリンピックや東京2020パラリンピックへの熱が年々高まっていることもあり、「スポーツ」をきっかけにすることで、児童たちにより義足について親しみを持ってもらい、多様性を感じてもらえるのではないかと。そんなことを考えるようになったという中村さん。

退職を間近に控えた2021年1月、パラアスリートの山下千絵選手（SMBC日興証券所属）を迎えて、ユニラン授業を開催することになりました。



## 教師生活の最後に伝えたかったメッセージ

ユニラン授業の当日、体育館に集まった児童たちは、スポーツ義足を体験。山下選手にも「トイレやお風呂に入るときはどうしているんですか？」「どんなふう走るんですか？」と物怖じしない様子で、次々と質問を投げかけます。中村さんもそんな児童たちの様子を笑顔で見つめていました。

山下選手は膝から下の「下腿義足」で、中村さんは太ももから下の「大腿義足」。ユニラン授業では、同じ義足でも違いがあることや、人によってバリアの感じ方が違うこと、そしてそうした違いを踏まえた思いやりが大切であることを、中村さんからも児童たちに説明しました。

中村さんには今回の開催にあたって、ユニラン授業に期待するある想いがあったといえます。

「山下選手のように義足でイキイキと活躍している人がいることを児童たちに知って欲しかったんです。私自身、義足になってからも教師という仕事を続けてこれました。人生で辛いことやくじけそうなことがあっても『これくらいなんだ、大したことじゃない！』と前を向く気持ちが大切なことを、児童たちにも伝えられたら、と思っていたんです」

困難に直面しても、後ろ向きになるのではなく、くじけず、ポジティブに前を向くこと。それは中村さんご自身が義足になってから学んだ「生きる姿勢」でもありました。

実際にスポーツ義足を体験したことで、そうした中村さんの想いが自分ごととして伝わったのか、授業後に「校長先生は義足なのに、朝はいつも正門に立って、みんなに笑顔で挨拶してくれる。それが本当にすごいことだと気づいた」と、感想を寄せてくれた児童さんがいたことが、本当にうれしかったそうです。

「自分が義足になって初めてわかったことがたくさんあります。何より感じたのが、障がいを障がいと感じさせなくするような工夫が、社会にはもっともっと必要だということ。自分が障がいを抱えて得た気づきを、児童たちにも最後に伝えられた気がします」

ユニラン授業を振り返って、そのように語る中村さん。多様性についてはもちろん、いろいろな目線を持つことの大切さや、画一的ではない相手に合わせた思いやりや配慮の心を持つことの大切さも伝えられた気がする。そのようにも話してくれました。

教師生活を締めくくるとして、中村さんにとっても、生徒たちにとっても、心に残る授業となったようです。



# OTHER STORY

この義足体験で義足の方の見かたが  
変わりました。  
私は障がい者という目線で見ていたけれど、  
今日の体験で  
みんなと同じなんだと感じました。

長州町 6年生

この授業で、特に心に残った事は、  
足を切断してしまった理由です。  
足を切断したくて、  
それはその人の個性になったという事なので、  
ぼくは、普通に接したいと思います。

高師匠 5年生

私はマットのちょっとした段差が  
怖かったので、こういう事も改めて大切だと  
思いました。今回授業をやって、  
障がいがある無いかかわらず、  
みんな同じという事や  
一人ひとりのちょっとした行動がその人に  
とっても大きい事だと思ったのと、  
これからも思いやりのある  
行動をしていきたいです。

調布市 6年生

この授業で考えたことは、足を失うことで  
どのような負担がかかるかということです。  
でも、そんな負担も  
がんばって乗り切っている山下さんは  
かっこいいと思います。

高師匠 5年生

今回の授業をどうして障がい者の人に  
やさしくせし、障がい者の人のために  
スロープや手すりなどある町に  
していきたいと思いました。

長州町 6年生

義足を使いこなすのは大変だし、  
義足の人は、義足で走るのが速いのではなく、  
一生けん命に走っているからだと思います。  
義足を使ってない人が  
走る練習をするでしょうか？  
義足は人の足と同じなのです。  
人の足の代わりなのです。  
病気、事故、戦争、生まれつきで  
足や手がなくてもあきらめず走るすがた。  
とてもかっこいいなと思います。

今治市 6年生

このような体験は1回きりの体験と  
思っていたので、とても集中できました。  
家の中での義足の人のために  
仕組みもあることがすばらしいと  
思いました。

今治市 6年生

義足を毎日はいっていると義足というのは  
山下選手にとって  
どういう存在なのかと思いました。  
今後、障がいのある人と出会ったら、  
やさしく手をさしのべてあげたいです。

高師匠 5年生

私はこの授業を受けるまでは、  
義足の事をあまりよく知りませんでした。  
そして、あまり知らうともしませんでした。  
でも今度からは、義足の事にも興味を  
もってみたいです。そして困っている人が  
いたら進んで助けたいです。

今治市 6年生

義足がまだ社会になれてないから、  
かわいそうや、大変そうなど思われている  
ということがひびきました。  
メが木と同じように社会に慣れて行って  
ほしいなと思いました。

広島市 6年生

どちらも努力していることは同じなので、  
義足を使っている人も、使っていない人も、  
みんなお互いに努力をしていくのが  
いいと思いました。

今治市 6年生

みんなが暮らしやすい社会を作っていくことが  
大切だなと思いました。

今回は、スポーツ義足のことについて  
教えてくださりありがとうございました。

今治市 6年生

義足体験授業を通して、  
ふだん私たちが上がったり下りたりしている  
段差や階段、坂道は義足の方々には難しい  
ことが分かったので、  
これから身の回りにユニバーサルデザイン  
のものが増えていったらいいなと思いました。

広島市 6年生

話を聞いているとそこまで変わらない  
生活なんだなと思いました。  
そんな甘い考えを持って実際に義足の  
体験してみると、バランスがくずれたり、  
動きにくくてやっぱり  
難しいんだなと思いました。

広島市 6年生

義足の走り幅飛び記録の距離を教室で  
実際はかってみると、  
長くてこんなに跳べるのかと思いました。  
私は、陸上記録会で、  
走り幅跳びにでます。  
まだぜんぜん飛べないけどもっと練習して、  
又吉康十選手みたいになりたいです。  
陸上記録会がんばります！

甲府市 6年生

2時間という短い間だったけど  
たくさんことが知れました。  
いろんな所にユニバーサルデザインが  
使われていて、すごしやすくなっていることが  
あらためて分かりました。

広島市 6年生

このじゅぎょうがあると聞いた時  
楽しみでたまりませんでした。  
いざやるとむずかしかったです。

長洲町 6年生

私は、はじめ義足に対して良いイメージが  
あまりなかったけど義足体験や千絵選手の  
話を聞いて良い印象をもちました。  
義足でのスポーツは苦しいものだと思って  
いたけど、走ったりすることが楽しいことだと  
千絵選手から伝わってきました。

上田市 6年生

話を聞いて義足をつけている人は、  
けってかわいそうではないということ  
改めて感じました。  
そして、義足をつけていても  
健常者をこえる記録を出している人がいて、  
その人はたくさん努力を  
していると知りました。

葛飾区 5年生

今回の授業を通して、義足に違和感のない  
世界になってほしいとおもいました。  
これからは、障がい者に優しくさせて  
世の中のユニバーサルデザインなどを  
増やしたいなと思いました。

長洲町 6年生

「障がい者」と聞くと暗いイメージや、  
不便というイメージがあったけど、  
片足を失っても、明るく生きる  
山下千絵選手の話を聞いて、  
暗いという考え方がなくなりました。

佐賀市 6年生

先日は、義足体験教室をして下さり、  
ありがとうございました。  
この授業で、いろんな人がみんなが  
楽しくくらせるよう努力していることに  
気付きました。

葛飾区 5年生

義足体験をして、最初は足がないと  
不便だと思っていたけど、  
話をしているうちに私たちの生活と  
変わらないことがわかっておどろきました。

船橋市 5年生